

領土・主権展示館 企画展

尖閣諸島と 日本人



～開拓と中国からの感謝状をめぐる史実～



わが国固有の領土、尖閣諸島
出典：内閣官房ウェブサイト

領土・主権展示館 企画展

尖閣諸島と日本人



～開拓と中国からの感謝状をめぐる史実～

19世紀後半、欧米列強が東アジアに進出する中で、明治政府は近代的な国家形成のために様々な統治の仕組みを整えることに尽力しました。日本の領土の範囲を明確にすることは、国際社会の中で主権国家としての地位を築く上で重要な取り組みの一つであったといえます。

19世紀後半までどの国にも属していなかった無人島であった尖閣諸島は、1895年（明治28年）1月、閣議決定により正式に沖縄県に編入され日本の領土となりました。

尖閣諸島においては、領土編入の前から日本人による利用が始まりましたが、当時の離島の開拓は決して容易なものではなく、先人の絶え間ない苦勞と知恵の積み重ねがありました。

大正時代に入ると、尖閣諸島沖で遭難した中国（当時は中華民国）の船を、尖閣諸島で活動していた日本人漁業者が救助したという出来事がありました。このとき、中華民国から沖縄県に感謝状が贈られています。日本人が尖閣諸島を開拓していたからこそ起こりえた興味深いエピソードです。

戦後、尖閣諸島は沖縄の一部として米国の施政下に置かれ、1972年（昭和47年）に日本に返還されます。その米国施政下と沖縄返還後を通じて、尖閣諸島では、動植物の固有種等について琉球大学をはじめ日本人による学術調査が行われてきました。近年では、ヤギの食害によると見られる地形や生態系への影響なども報告されています。

尖閣諸島は現在、沖縄県石垣市の行政区です。2010年（平成22年）12月、石垣市は1月14日を「尖閣諸島開拓の日」と定める条例を制定し、この条例の制定を記念して、2011年（平成23年）、2012年（平成24年）の二年度にわたって「尖閣諸島開拓の歴史と自然展」を開催しました。

昨年、東京の領土・主権展示館のリオープンにあたり、この「尖閣諸島開拓の歴史と自然展」の内容を元に、最近の研究の成果を加味した企画展「尖閣諸島と日本人」を開催しました。

本巡回展では「尖閣諸島と日本人」と併せて、北方領土、竹島についてその歴史的経緯や我が国の立場を紹介します。

〔展示協力〕
沖縄県石垣市
石垣市立八重山博物館
沖縄県立博物館・美術館
那覇市歴史博物館

第1章

尖閣諸島の開拓

尖閣諸島を明治初期の時代に開拓するのは容易なことではありませんでしたが、バイタリティ溢れる先人の熱意と努力によって実現に至りました。

江戸時代の鎖国政策が終わった明治初期の頃、産業や社会の近代化とともに、島国日本の周辺に数多く存在する島々への開拓意欲は活発化し、その行動範囲は急速に拡大していきました。

当時、「南洋開拓の先駆者」と称される玉置半右衛門たま おき はん え もんは、小笠原諸島や大東島の開拓にも従事しましたが、鳥島においてアホウドリの羽毛の輸出により、膨大な利益を得ました。

1880年代後半から1890年代にかけて、玉置の成功に刺激を受けて無人島探検ブームが起こります。多くの人々が、一攫千金を夢見て南の島々の探検・開拓に挑戦しました。

こうした人々の中に、沖大東島の探検を試み、また南鳥島を発見した水谷新六が、そして尖閣諸島の開拓にあたった古賀辰四郎がいました。これらの島々は、政府による領土編入の試みと相まって、人々の探検・開拓等により、日本の領土に編入されました。

第一章では、尖閣諸島の開拓を、明治初期に行われた先人による無人島開拓の一つとしてとらえ、民間人企業家古賀辰四郎による尖閣諸島開拓の歴史を振り返ります。

無人島開拓と領土編入の歴史

1880年代後半から1890年代にかけて、無人島探検ブームが起こります。

南洋の島々を開拓し、アホウドリの羽毛の輸出により成功をおさめた玉置半右衛門を筆頭に多くの人々が、一攫千金を夢見て南の島々の探検・開拓に挑戦しました。



尖閣諸島を開拓した 古賀辰四郎

尖閣諸島では、日本が領土編入を行う五年前の1890年（明治23年）頃から、地元の漁業者は尖閣諸島に渡って数カ月滞在し、アホウドリの羽毛や夜光貝の貝殻などの海産物を獲っていました。

しかし、尖閣諸島の開拓の歴史において、もっとも精力的に島を開発し、利用したのは古賀辰四郎でした。古賀辰四郎は、福岡から沖縄にやってきた寄留商人で、尖閣諸島の開拓を始める前には、那覇と八重山に古賀商店を開き、貝殻や羽毛を、兄弟が経営する大阪の古賀商店本店を通じて、外国企業に卸していました。当時、ヨーロッパでは美しい鳥の羽や羽毛は婦人用装飾品に利用され、貝殻は、ボタンなどを作るために使用されていました。

沖縄で古賀商店を経営する中で、古賀は石垣島で漁師などから無人島である尖閣諸島が海鳥の繁殖地であることを伝え聞いたとされています。

1896年（明治29年）、沖縄県は尖閣諸島の開拓を海産物商人の古賀辰四郎に許可しました。古賀辰四郎は、尖閣諸島の領土編入以前から開拓を申請していたといわれていますが、政府による領土編入の手続きが完了してようやく、開拓の許可を得ることができました。

古賀辰四郎は、国有地であった尖閣諸島四島（南小島、北小島、魚釣島、久場島）の30年間無償貸与を受け、1897年（明治30年）、開拓を開始します。

尖閣諸島では、最初アホウドリやセグロアジサシといった海鳥のはく製や羽毛を採取して輸出しましたが、アホウドリが減少すると、魚釣島にカツオ節の製造工場を作り、尖閣諸島付近でとれるカツオをカツオ節に加工しました。

1909年（明治42年）、古賀辰四郎は尖閣諸島開拓その他の功績が認められ、公衆の利益に寄与した者に贈られる藍綬褒章を下賜されました。



古賀辰四郎 財団法人古賀協会所蔵

古賀辰四郎略年譜

- | | |
|--------------|--------------------------------------|
| 1856年(安政3年) | 福岡県上妻郡(現八女市山内)で、古賀門次郎の三男として生まれる |
| 1879年(明治12年) | 沖縄に渡り、那覇に古賀商店を開設 |
| 1882年(明治15年) | 八重山にも古賀商店を開設 |
| 1895年(明治28年) | 尖閣諸島4島(南小島、北小島、魚釣島、久場島)を沖縄県所轄とする閣議決定 |
| 1896年(明治29年) | 尖閣諸島4島の無償貸与を受け、開拓に従事する |
| 1897年(明治30年) | 尖閣諸島の開拓を開始、アホウドリの採取を始める |
| 1905年(明治38年) | アホウドリの減少に伴い、魚釣島でカツオ漁とカツオ節製造を始める |
| 1909年(明治42年) | 藍綬褒章を下賜される |
| 1918年(大正7年) | 死去。長男の古賀善次が事業を引き継ぐ |

写真で見る 古賀辰四郎の尖閣諸島開拓

古賀は、1896年に尖閣諸島4島（南小島、北小島、魚釣島、久場島）の無償貸与を受け、開拓に従事しました。開拓は、久場島を中心に始まり、1900年に書かれた久場島の地図には「古賀村」の記載も見られます。1908年には魚釣島（当時、「和平山」とも呼ばれていた。）のカツオ節製造事業も軌道にのりました。尖閣諸島各島の居住者は、99戸、総数248名を数えたといえます。



「北小島鳥類群集」1900年(明治33年)

「古賀辰四郎へ監授褒章下賜ノ件」『明治四十二年公文雑纂内閣四巻四』国立公文書館所蔵
北小島の一面を覆うセグロアジサシの一群。古賀はこの鳥を帽子飾りの材料として半剥製に加工し、欧州向けに大量輸出していました。



「和平山事務所」1908年(明治41年)

「古賀辰四郎へ監授褒章下賜ノ件」『明治四十二年公文雑纂内閣四巻四』国立公文書館所蔵
遠景から魚釣島の鰹節工場全体の様子がうかがえます。和平山は、魚釣島の別称です。



「和平山事務所」1908年(明治41年)

「古賀辰四郎へ監授褒章下賜ノ件」『明治四十二年公文雑纂内閣四巻四』国立公文書館所蔵
茅葺小屋の前で撮影された写真です。和服姿の夫人や洋装の男性、男児の姿も見え、当時の魚釣島には様々な人々が滞在し、開拓が順調だったものと考えられます。



「魚釣島で開拓に従事する人々」1908年(明治41年)

那覇市歴史博物館提供
カツオ節工場の中です。当時の工場の規模を知ることができます。セイロにカツオ節が並べられています。

近年の資料調査で 明らかにされる尖閣諸島の開拓

横内家文書にみる尖閣諸島

沖縄県では第二次世界大戦によって歴史資料の多くが失われてしまったと考えられています。とくに沖縄県庁の焼失により公文書の多くが失われました。

このため、戦前の尖閣諸島に関する資料は非常に貴重です。ここでは、その貴重な資料の一つとして、那覇市歴史博物館が所蔵する「横内家文書」について取り上げます。

横内家は、江戸時代に彦根藩の藩士として井伊家に仕えた家柄でしたが、第九代当主横内扶^{たすく}が明治維新後に沖縄県官吏となり、1913年（大正2年）に沖縄県庁を退職するまで知事官房などの要職を務めました。退職後、彦根（滋賀県）に戻りますが、このとき、職務の際に扱った文書の控えや写し、資料等を持ち帰り所蔵していました。「横内家文書」はこのほかにも彦根藩時代より代々伝わる資料が含まれ、約16,000点にのぼります。1993年（平成5年）、これら資料は御遺族により那覇市歴史資料室（現、那覇市歴史博物館）に寄贈されました。

「横内家文書」には、明治期の沖縄県政を明らかにする資料が多数含まれており、今なお調査研究が進められています。尖閣諸島に関するものも数点見つかっています。今回中央の展示ケースにて、尖閣諸島に関する記述が含まれている書簡であり、当時の尖閣諸島への認識がうかがえる2点を紹介します。

クリック

尖閣諸島産のカツオ節が利用されていたことがわかる書簡

クリック

尖閣諸島に出漁する漁業者への便宜を求める書簡

【裏】

沖繩県

奈良原知事殿

御直披

【裏】

メ 大海原尚義

拝啓時下残暑

之处愈以御清適

敬賀至極ニ奉存候。偕

先般御寄島之節

ハ御多々之至何ノ風

情も無之、其後早

速御安着之御伺

可申上之賦ニ御座候

処、無程鹿兒島へ

出張仕、此程帰島

仕候次第ニテ慮外ノ

御疎□御悔恕奉

仰候。

一先般立寄之節

紹介仕候熊本県人

原田嘉久次及野田正

ト申者、コバ島漁業

ノ目的ヲ以貴縣へ罷

越候趣既ニ同志者

先発致居候者も有之、

此組合ハ随分信用

アル組合ニ有之、前途

頼母敷奉存候間申迄

も無之義トハ奉存候得

共可成の御引立ヲ

蒙リ度、原田氏ハ大

島ニテ植産事業ニ

従事致居兼而懇

意致候義ニ付別

而此由添申仕候間宜

敷御引立ノ程奉仰候。

先ハ時下御伺旁如

斯ニ御座候頓首

八月廿九日 大海原尚義

奈良原明府閣下

【表】

河村内

横内様

御奥方

【裏】

メ

七月三日

承(うけたまわ)れは御不快之由
御手少の處いか斗りか不自由
の御事御察し申上候、平常
何かと御厄介になり候に
むくいには斯る時何をがな
と存し候へ共、よき思ひ
つきも無くさし当りて
御こまりと存じ候まゝ、
わつか斗りの間なれど無きには
まされり一人さし出し候まゝ
御手まわりの御用までは使ひ
御命し被成なとせつか
早々出し度候へ共、申なとも
小児のみにてやはり厄介
ハ免(まのが)れず何等の御足しにも
ならぬと存じ、心斗りあせり候
へ共、私も今日より漸う
起きた処故、どうしやうも無候
いづれ御なをりの御左右うかがひたらは
まいるべく候、只許のうちは却つて
御手無益候処故わざとまいらず
一寸御見舞のみ申入まいらせ候
此鯉節ハ尖閣列島和平山
何とかした人の製造にかゝる
もの先日河村病氣にて
粥をのみ食したる折など
田麩にして進め候、大そう
おいしはと申候ソワプニ煮立て
滋養は多かるべく候
御使用被下候ハゞ幸に御座候
七月三日
河村内
横内令夫人
御許江